

北九州市立大学  
文学部紀要

第83号

— 目 次 —

パウル・ブッソン『救われざる者』／アルノ・ハーハ『街道沿いの城』

… 岩本 真理子 訳

北九州市立大学文学部  
比較文化学科  
2014

## 救われざる者

「挿んで！―前へ！」

「よしきた！」

ささやくような会話。彼は木蓋が棺の上に置かれ、びったり閉まるようにずり動かされるのを聞いた。妻のすすり泣きや痛ましい嗚咽はもう聞こえなかった。人々が彼女のことを氣遣つて無理にこの場から連れ去つたのだろう。

止めネジがぎしぎし音を立てながら板壁に穴を開けて入ってくる。彼には脇に取りのけられた植木鉢や灌木のざわざわことという音も聞こえた。

一人の男がくしゃみをして、そのはずみで背中を棺にぶつけたので彼は揺さぶられた。そいつは小さな声でぶつくさ独り言を言った。

棺台に安置されている男の体は硬直している。すべての感覚を失つて。体のわずかな部分たりとも動かすことができない。

しかし音は聞こえるのだ！それに脳はひどく調子の狂った懐中時計の歯車のように働いている。神経も筋肉も、普段の機能を失っている。ごくかすかな叫び声すらあげられない。声を出す

のに必要な呼吸もできない。しかし脳は残酷な鮮明さで、これが今回は決して夢ではないということを彼に認識させている。

いや、夢ではない。もう丸二日、彼の哀れな冷たい肉体は棺桶の底で、斜めに向かい合った板壁の間に押し込まれて横たわっているのだ。そして丸二日、人々は彼の傍らで、すぐ横で、ささやいたり、泣いたり、慰めたり、祈ったり、花輪のリボンをかさかさいわせたりしていた。彼の仕事部屋にある大きな振り子時計がくぐもつた音で三十分ごと、一時間ごとに厳然と時を告げていた。

聴覚のみに刺激されたせいではほとんど超自然的な感受性を得た脳は、ふと心に浮かんだ希望にももう全くごまかされなかった。脳は知っているのだ。「俺はまだ生きている―なのに埋葬されるんだ！」これに比べれば、最後に味わった肉体的な不安感など何だっただろう！この恐ろしい自覚に比べれば。心臓がむごたらしく押しつぶされるような苦痛―窒息の恐怖―幻覚や幻聴―それから徐々に意識が戻ってきた。その直後、恐ろしいことに気づいた。もはや体がいうことを聞かず、死んでいる―

パウル・ブッソン  
岩本 真理子 訳

しかしやはり死んでいないということに――耳は聞こえているのだから！

彼は想像の中でけたたましい悲鳴を上げ、そう言おうと思つてゐる救いを求める言葉を叫び、腕を持ち上げてこぶしで蓋をどンドン叩き、足を曲げたりのぼしたりして棺の端をガタガタいわせた。

だが、だめだ――器官はもはや作動しない。――

重たい足音が近づいてくる。ぼそぼそという話声――ひっかくような音――たこのできた手がかんなをかけられた板に触れる音だ――静かに下に置く音、低い声がラテン語を唱える――高い声が一本調子でそれに答える。提げ香炉の鎖がじやらじやら鳴る。そして彼は妻が激しくしゃくりあげる声を再び聞いた。それから泣き声は止んだ。

馬車がガラガラ音を立て、馬が足踏みをし、はみを嘯み鳴らし、砂利がざくざくいう――そして棺が静かにきしみながら頑丈な台の上へ滑っていく。人々がひそひそ話す声、パタパタという足音――そして馬車が静かに動き出す――

彼の思考は狂おしい恐怖の中で駆り立てられ、黒い戦慄で満たされた深淵へと墜落し、気も狂わんばかりに渦巻いた。一体こんなことがあり得るのか、一体こんなことが考えられるのか。こんなにあっさりと俺を・・・？！

そして骨の髄まで揺り動かすような恐ろしいトロンボーンの音が彼の耳にくぐもつてとどろき、他の音をかき消す。

短和音――絶望的で、逃れる術もない、威力ある音。

その合間に鐘が唸り声を上げる――鉛のように重い、震える音を沈ませながら。

彼は人々が彼を持ち上げる音を聞き、後からついてくる足音を聞き、足音の響き具合が変わったので、掘ったばかりの土の上を歩いていることを知った。苦悶のイメージが痙攣のように戻ってきて、彼の頭の中で恐怖の叫び声が耳をつんざいて響いた。

再び二つの声が一連の陰鬱な問答を交わし、また提げ香炉の鎖が鳴る。――それから大きくはつきりと最後の告別の祈りが響く。

「魂の安らかに憩わんことを。」

ほとんど聞き取れないほどの泣き声がしたが、弱々しい声は棺の周りの音にかき消された。棺は下へ降ろされ、うつろな音を立てて地面に当たり、縄がずるずると引き上げられる。花輪がひとつばさつと落ちてくる、二つ目、そして三つ目――土の塊がそのあとから落ちてくる――さらに多く――さらに多く――そして――それから――すっかり静かになる・・・

そして今、彼は右手の指二本をうまく動かせるようになった。

Paul Busson: *Rettingstlos* (1903)

## 城の沿道街

アルノ・ハーハ

岩本真理子 訳

燃えさかるような埃っぽい街道に歩を進めていた間、いや、ほとんど無意識のうちに片足をもう一方の足の前に出していた時、私の思いは繰り返し繰り返しある時点へとさまよいもどつていた。それはちょうど鳩舎を飛び出して農家と近くの畑の周囲をぐるりと飛び回って、また鳩舎に戻る鳩のようだった。

過ぎ去った出来事が私の眼前に、もう一度経験しているかのようにありありと浮かんでいた。

いつものように私たちは喫茶店に座って、あれこれとくだらないおしゃべりにふけていた。一人は私たちの会話なんかそつちのけで、新聞を読んでいた。短い沈黙が流れたまさにその瞬間、そいつが半ば声に出して「あほうな変人だ」と独り言を言った。私たちはこの奇妙な偶然の出来事に笑い、一体あほうな変人とは誰のことだと尋ねた。そこで彼は話してくれた。新聞にあるアメリカ人のことが書いてあるが、こいつは徒歩で地球一周旅行をするつもりなのだ。しかしこの計画の奇妙な点は、彼が一文も持たずに旅に出て、行く先々で物乞いをして食っていくこうとしていることなのだそう。果たしてこんなことが可

能なのだろうかという問いを検討したが、賛否両論白熱して私たちは興奮した。誰も彼も自分の意見を押し通そうとした。私は、このような企ても可能であり、実行できるという意見を持つ一人だった。他の連中は異議を唱え、反証として、たとえば我々の中にもたった一週間でもこんなやり方で放浪できるものは誰もいやしないという事実を引き合いに出してきた。この論拠にとりわけ反論したのはこの私だった。そしてついには、賭けをしようじゃないかと申し出た。私は、今日中に何の準備もせず無一文で出かけて、足の向くままに七日間放浪してみるつもりだと言ったのだ。みんな賭けを承知し、私は手持ちの現金と金目のものをすべて手放し、下宿のおかみさんには喫茶店からそのまま旅に出たと電報で知らせてやった。

「これがつまり、お前がここで埃まみれで日に焼かれてうるつきまわっている理由なんだぞ。」思いがまたあの時点に戻りつくたびに、私は何か不思議なことに対する単純な説明を見つけ出しでもしたかのように自分に言い聞かせた。

現実に私に降りかかったことと、現実世界から切り離された

ように喫茶店に座って思い描いていたこととの間には、なんと  
 いう違いがあったことか。何の苦労も考えずに熱い論争を交わ  
 していた時にはあんなに楽に思えたことが、いざ実行してみる  
 と恐ろしく困難な重荷であることがわかった。初日に早速まる  
 でありがたくない経験をしてからというもの、よもや自分の中  
 にこのような感情が息づいていたとも思わなかった妙な物怖じ  
 や、やり慣れないことに対する不安のせいで、通ってきた村々  
 で施しを乞うこともうまいかなかった。無愛想な言葉で拒絶  
 する人もいれば、当局に訴えるぞと脅す人もいた。私は不愉快  
 な出来事に腹が立って意固地になつていたし、まかり間違つて  
 逮捕でもされてこの旅を早々と終わらせたくはなかったので、  
 腹をすかせたまま、荒れ狂う空腹をおとなくさせる良い機会  
 を待つほかには手だてがなかった。

もう四日目だった。太陽は私の真上からじりじりと照りつけ  
 た。前の日の昼から何も食べていなかった。熱からくる悪寒で  
 全身ががくがく揺さぶられるのを感じた。二晩も戸外で寝てい  
 たのだ。何度もわか雨に会い、温まることも体を乾かすこと  
 もできないまま、肌まですぶぬれになつていた。初日とそして  
 二日目もまだ、私は歩いて通つた土地の風景を楽しんでいたが、  
 だんだんと自然の美しさに対して鈍感になつていった。眼差し  
 は足を置いている地面にじっと注いだままで、思考はいつもあ  
 の喫茶店での会合に終わる循環の中をぐるぐる回る以外何もで  
 きなかった。私は自分の歩き振りが心もとなく危なっかしいも

のになつてきたのがわかった。熱く締めつけられるような感じ  
 が時々胃から昇つてきてのどの中で続くように思えた。その上、  
 息の詰まるような短く激しい咳が加わり、けいれんのように全  
 身をひどく揺さぶつた。こうなると咳に揺さぶられてひっくり  
 かえらないように、立ち止まって手近な木に両手でしがみつ  
 かなかつた。またしてもそんな発作に襲われた時、私は何の  
 気なしに視線を上げ、少し離れたところに緑の木々が鬱蒼と生  
 い茂つた丘があるのに気づいた。緑なす梢の向こうには、かん  
 かん照らす陽の光の中に城のような古い家の赤い屋根瓦が照り  
 映えてそびえており、真昼の日差しの輝きの中にいくつかの窓  
 がまぶしくきらめいているのが見えた。自分の目がだしぬけに  
 とらえたこの優雅な光景が消えかけていた力に新たに生気を与  
 えたので、私はどうにも説明のできない確信を持って道を歩み  
 続けたが、それは目的地が近くに見えたおかげで沈んでいた気  
 力が喜ばしい希望で癒された人のようだった。道は城と鬱蒼た  
 る緑の木々の周囲に大きく弧を描いてくねくねと伸びていたの  
 で、いくら足を速めても丘に着かないように思えた。カーブを  
 曲がるごとにまた次のカーブが続くので、次第に確信も希望も  
 消え失せ、私はもう全く肉体的にも精神的にも参つていた先程  
 の状態に戻つてしまった。すさまじい空腹が恐ろしい苦痛となつ  
 て突然意識され始めた。太陽の灼熱は耐え難い重荷に思え、し  
 全く気づかないうちに私の思考はまたしてもあの堂々巡りをやっ  
 ていた。意識朦朧としていたが、奇妙な肉体的感覚が感じられ

るといふ事実が突然私を目覚めさせた。片方の足がもう一方よりもだんだん長くなってきたようで、足を置いてある地面は沈んでいくように思えたし、一歩歩くごとに私の足の裏から大地はますます退いていくかのようだった。全く気づかないうちにもう片方の足も伸びてしまったようで、高い竹馬に乗って歩いているのだと思えてきた。地面に足を片方乗せるごとに、その音が途方もない深淵から妙に金属的な音となって耳にこだましているような気がしてきた。それは深い井戸に水を注ぐと、水が内壁に当たってばしゃつという音が何秒も経ってから聞こえるのにも似ていた。足の竹馬はますます長く伸び、深みからのこだまはますます遠く、支離滅裂で謎めいた響きを耳に残すようになり、私は体があまりにも長く伸びすぎて、重心を空中で保つことができなくなり、頭から前のめりに倒れてしまった。

だが不思議なことに私は地面には倒れなかった。地面に倒れる時の固い衝撃を恐れていたから、一瞬いぶかしく思わずにはいられなかったのだが、たいそう高いところから振り子のようになり前のめりに倒れた体には弾みがついていたので、私はまたぐるりと回転して上に向かって放り上げられ、そしてまた下に落ち上に上がりするうち、しまいにはだんだん速度を増して、まるで火の輪か何かのようにびゅんびゅん渦を描いて空中を自由に回転しているような気がした。初めのうちは息が詰まって窒息してしまいそうな胸苦しさに捉えられていたが、次第に解放されたかのように気持ちがよくなり、感覚がなくなってしまう

たが、まるで深い眠りから目覚めたかのように、銀のようなくすくす笑いが突然聞こえた。体の回転はどういう具合だかよくわからないが急に止まり、あの笑い声が私の意識をはっきりさせた。それと同時に、どういうわけか自分がある部屋に入り込んでいることに気づいてびっくりしたが、部屋の家具調度品はどうやらフランス革命以前の時代に用いられた様式のものだった。だが、この部屋にいる二人の人物が部屋の調度品と同じ時代様式の服装をしていることにはもっと驚いた。それは裕福そうで優雅ないでたちの貴族の紳士と、衣装から察するに市民階級とおぼしき若い女だった。自分がいる場所とたった今まで体験していたこととの矛盾を説明するような時間は私にはなかった。というのは、はるか昔の時代の特徴を備えたこの現在へと私を呼び戻したあの銀のような笑い声が新たに耳に響いたからだ！

「ほほほほ、伯爵様、うまくいったわね！ブラヴォー！あの人をあつさり追い出しちゃったのね！そりやそうよね、あの人、あなたの命令に従わなきゃいけない農場管理人ですものね。じゃまな召使をちよつとの間追い出しておくには、あなたの権利を利用するだけでいいんだもの。それに私だってあなたのこんなにご親切な無理強いに負けるのに迷ったりしませんわ。」この言葉を吐いたのがあの若い女だった。伯爵は腕を彼女の腰に回し、答える代りに彼女の口に激しくキスをした。私が部屋の真ん中に立っているのに、まるで姿が見えないかのように二人が

私に気づいていないらしいのは不思議だった。「それに考えてみて、伯爵様」と女は続けた。「あの人ったらあなたに妬いているのよ。本当に妬いてるのよ。あの人、あなたが私にやさしくて、親切にしてくれるのに気がついて、私に命令したのよ。

あなたに近づくなんて。そりゃあきつく言いつけたのよ！」また彼女は銀の笑い声をあげた。嘲りがその笑い声に、割れたものがガチャガチャいうような不快な雑音を加えていた。「それにあの人、優しくなつたわ。いろんなものをプレゼントしてくれるのよ。あの人のためにそれでお洒落をしてくれて！」そう言ってブロードの髪から空のように青い刺繍入りのリボンをほどき、情人の目の前にかざした。「ほら、これ。先週あの人を買ってきてくれたの。あなたが馬商人と交渉してこいつで町に行かせた時よ。」伯爵は考え深げな面持ちで微笑み、嘲るように言った「我が管理殿は夫たるものの鑑だな。」そう言って女を抱きしめ、恋人同士らしくふざけて女を高く抱え上げた。

女は彼の首に抱きつき、顔を猫のように柔らかに相手の顔にすり寄せた。その時彼女はうっかりヘアリボンを床に落とし、この貞節の裏切りの象徴は紳士の足の下になった。彼は女を壁際の毛皮で覆われた長椅子に運び、そっとその上に寝かせた。女の腕は彼の首から離れず、彼がこの褥の上に跪くしかないように仕向けた。彼は片腕を彼女の体の下に差し込み、胸を彼女の胸に押し当てた。「いちばんきれいな子猫ちゃん。」彼はかみしめた歯の間から耳元でささやいた。「この魔女め、愛の女神、

押しつぶして殺してしまおうか？」返ってきたのは短くて明るい哄笑だった。彼の口は彼女の口を求め、重く喘ぐような息遣いになった。

突然、階下から大声が響いてきて部屋まで届いた。彼女は急な動作で愛撫から顔を引き離し、驚きのあまり色を失った唇を震わせて言った。「何てこと！伯爵様、あの人帰ってきたわ！あの人に来るのが聞こえるわ！」

実際、階段に重く慌たましい足音が聞こえた。伯爵は飛び起きて扉に急いで近寄り、門をかけた。「あいつが帰ってこられるわけがない。」彼はなだめるような口調の小声で彼女に言ってきた。それから扉に耳をつけて聞き耳を立てた。足音はさらに近づき、扉の前で止まった。同時に扉が激しく叩かれ、誰かが差し迫った大声で叫んだ。「伯爵様、伯爵様！」部屋の中の男は声を立てず、同じように静かにしていると女に手で合図をした。彼女は恐怖に青ざめて、広く張り出した家具の角に逃げ込み、顔を両手で覆ってしゃがみこんでしまった。伯爵は爪先立ちで彼女に近寄って言った。「本当にあいつだ！」こう言いながら彼自身も、管理人の予期せぬ帰還に激しい驚愕を隠すことができなかった。「ああ、神様、どうしたらいいの？」彼女は震えながらささやいた。「もしあの人に見つかったら殺されるわ。」

二人がしゃべっている間にも、またしても扉がノックされた。そして前にもまして切羽詰った調子で、外にいる男は主を呼ん

だ。この数秒間がこの場に居合わせた人間すべて、つまり室内の二人と扉の前の一人に、責め苦をはらんで忍び寄る冬の日のように重くのしかかった。万事休すという様子で伯爵は部屋の中を見回した。恋人を隠すのに使えないかと吟味しながら家具をひとつひとつ見つめていた時、彼の顔に突然微笑みが浮かんだ。すばしこくソファをつかんで静かに壁から離し、慌ただしく探るように壁を触りながら早足で壁沿いに歩いた。彼は探していたらしいものを見つけた。というのは、明らかに安堵を表す面持ちで、壁の一箇所を押したからだ。一枚の扉がぱつと開き、その向こうに暗い空間が見えた。彼は女の子の手を引っ張って扉の所に連れて行き、せかせかとささやいた。「あいつが行ってしまったら出してやるからね。」そして彼女を隠れ場所に押し込み、扉を閉め、ソファを元の位置に戻し、明らかにもう一度呼ばれるのを期待している様子でそのソファに座った。扉の前の男が再び彼を呼び、同時にこぶしで扉をどンドン叩いた時、まるでぐっすり眠っていたのが目を覚ましたようなふりをして立ち上がり、不機嫌そうに叫んだ。「おい、何事だ?」

「伯爵様!お願いですから開けてください。悪い知らせです!」伯爵は扉を開いて管理人を中へ入れた。「何事だ?」彼は短く尋ねた。「町へ行って」と言っただけだ。」

その時入ってきた男は巨人のような体躯の持ち主で、黒い髪と髭にぐるりと縁取りされた顔には、目にしたものすべてを見通すかのような黒い瞳がらんと輝いていた。それでも堂々

たる体格や恐ろしい外見とは裏腹に、この男の態度にはどこか不安気な、哀願するようなところがあつた。

「町に行く途中だったので、伯爵様」と彼は主人の問いに對して許しを請うように答えた。「しかし先へ進めませんでした。森が境界線から牧場まですべて炎に包まれているのです。すぐに百姓どもを駆り出して消火に当たらせなければ。さもないと何も残りません。」

この知らせは彼の主人をさながら青天の霹靂のごとく襲つたようだった。「何だと」と彼は叫んだ。「ちようど売ろうと思つていたあの森が?あれはわしにとつて現金も同然だというのに!」

管理人はこっくり頷いたが、その視線は部屋の中をあちこちあてどなくさまよつた。突然彼の顔をさつとよぎつたのは、あたかも人類の悪意と怒りすべてが一瞬彼の中に乗りこんできたかのような表情だった。彼は妻のヘアリボンが床の上にあるのを見つけたのだが、それは恋の戯れの間に滑り落ちたものだった。発見の悍ましさはその顔にほんの一瞬影を落としたが、それから彼は再び元の表情に戻つた。「伯爵様、ご自分で火事をご覧になりませんか?」そう言つて彼は刺すような眼差しで主人の目を見つめた。それは問いかけではなく、反論などできない強制的な懇願だった。「一緒に行こう」と伯爵は答え、急いで部屋から出て行つた。管理人はもう一度探るような眼差しで部屋を見渡し、それから電光のように素早く身をかがめ、ヘアリボンを拾い上げてポケットに押し込み、主人の後ろで脅かす

ようにこぶしを握り締めた。

それから私が見聞きしたことは、脈絡のない一連の映像が目の前を猛スピードで駆け抜けていくようなものだったので、断片が恐ろしく鮮明に記憶に残っているに過ぎない。どうやら私はまだ城のあの部屋の中にいるようだった。私には秘密の扉のある壁がありと見えていた。しかしそれと同時に私の眼差しは壁にも障害物にも遮られずに二人の男を追っていた。

私は二人が馬に鞭を当てる広い野原を音高く駆けていくのを見ていた。背景には森に覆われた山腹が聳えていた。濃い灰色の煙が渦巻いて、黒い塊から空へと昇っていた。幅の広い堀が野原を横切って延びていた。管理人は主人の後ろにびったりとついていった。彼らは堀に到達した。伯爵は堀を飛び越えるために馬に拍車を入れた。その瞬間、管理人は馬の後脚に乗馬用鞭で恐ろしい一撃を見舞った。馬は垂直に跳ね上がり、棒立ちになつて前足で空を蹴り、後ろ向きにどしんと落ちて乗り手を下敷きにした。管理人は猛烈な勢いで駆け抜けていたが、馬を停止させて飛び降りた。彼は倒れた馬の下から主人を引っ張り出したが、主人は一言も発しなかった。口からも鼻からも耳からも血が噴き出していった。「伯爵様」と黒髪の男は叫んだ。「どうなさいました？」返答はなく、身動きもしなかった。管理人は落馬した男の胸に耳を当てたが、その目は夜の山猫の目のように燃えていた。ついに彼は身を起こしたが、陰険な喜びが顔に浮かんだ。「死んだ！」

それから彼は自分の馬に乗り、手綱を緩めて広い野原を越えて駆け戻った。城の中庭では混乱したわめき声が飛び交っていた。「ご主人様が落馬されたー亡くなられたー」誰かが重たい足音を立てて階段を上がってくる。私は隠れようとしたが、激しい不安が首を絞めつけ、手足は見えないバンドで縛られ、金縛りにあつたように身動きもできなかった。管理人は部屋の中に立ち、恐ろしい目つきで部屋をあちこちと探した。「どこに隠しやがった？」怒りのあまりくいしばつた歯の間から彼はつぶやいた。私は彼の声をぞっとするほどはつきりと耳にした。突然彼は私を見つけた。私の心臓は止まった——叫ぼうとしたが、からからに乾いたのどからは何の声も出なかった。髪の毛が逆立ち、目が眼窩から飛び出すかと思われた。ゆっくりと、抗いがたい力のように彼は、恐ろしい男は私に近づき、燃える眼差しで脅かすように私の上に身をかがめた。「彼女はどこにいる？」彼がしゃがれ声でささやくのが聞こえた。もう彼は両手を私の方に伸ばしてくる・・・その時私は大きな叫び声をあげて身を引いたので、その悲鳴のすさまじさが私自身の耳をつんざき、一瞬意識を取り戻したが、それでもまた新たに激しい恐怖の淵に投げ落とされることになった。誰かが私の上に身をかがめて探るようにつめていたのだが、眼差しをじっと注いでいたその男は管理人だったのだ。私は抵抗しようとして彼に向かって手を伸ばして叫んだが、まるでこれまで体験したあらゆる恐怖からこの役にも立たない悲鳴で逃れようとするかのようだった。

その時、低くて柔らかな声が私の耳に届いた。「落ち着いて、さあ落ち着いて！ここにいれば安全ですよ。誰もあなたに何もしやしません！」

今度は私の精神も、熱に浮かされた夢から現実に戻る道をようやく見つけ出した。大きく見開いた私の眼にも見たものを識別する力が戻ってきたので、自分がベッドに寝かされていることに気づいて驚いた。病室特有の匂いが私の嗅覚に届き、馴染みのない場所で初めて目覚めた人がするように、いぶかしく思いついながら尋ねた。「ここはどこなんです？」

私の寢床のそばに立っていた男性が言った。「ここは病院です。あなたはこの近くの街道で熱で錯乱状態になっているところを発見されて、私たちの所に運び込まれたのですよ。そこで私たちはあなたを治療したのです。もう二、三日静養すれば退院できますよ。あなたの消息が全く途絶えてしまったので、ご友人方はあなたのことを心配して警察に届けたのです。おかげであなたの身元と、あなたの病気の原因が馬鹿げた賭けだったということが分かったのです。まあどうやら幸いなことに、この冒険はあなたに今後は悪い結果をもたらさないようです。」

医者が立ち去ってから、私は自分の体験すべてを再び思い起こしていた。何と奇妙な事だろう。私を熱に浮かされた夢から救った男が、あの夢の悪霊、あの管理人と同じ顔だとは！もうひとつ気になることがあった。私が寝ている部屋にどうも見覚えがあるのだ。窓の配置といい、大きな煙突があることをうか

がわせる壁の張り出し部分でさえも、部屋全体が記憶のどこかにあるものだった。だがそれが記憶のどこにあるのやら、どうにも説明がつかなかった。ついに私は安心できる説明に思い至った。私の精神が高熱のせいで恐ろしい物語の幻覚に巻き込まれていた時、いずれにしてもこの目でこの部屋を見ており、部屋の様子も潜在意識に記憶されたのだろう。おそらく医者についても同様で、この目で見た彼の風貌が夢の中の出来事に織り込まれていたのだろう。しかしあれこれ考えを巡らし、夢の中で体験した恐ろしい出来事の一部始終を次第に思い出すうちに、この部屋も夢の中である役割を演じていたことに突然気がつき、無意識のうちに物語を作り出す想像力が、現実の物事を何ら現実的な根拠を持たない空想の産物と織り交ぜてしまうことができるのだと思うと、私は微笑を禁じ得なかった。

翌日、医者が容体を見るためにやってきた時に、この病院はどういう所なのですかと尋ねてみた。ひよっとしたら現実と私の空想との間にまだ他にも関連があるのではないかということが知りたかったのだ。医者は言葉少なに語ったが、彼の言葉には不可解な興奮が隠されているように思えた。しかし彼の興奮は、この病院が昔は城であり、最後の城主は落馬によって急死したという話題とは全く無関係のようだった。城主には跡取りがいなかったもので、その当時の国が遺産を相続したのです。でもそれはもう百年以上前のことです。この建物の過去については偶然知ったのですよ。というのは、私の先祖の一人が私の一

族に関する重要な記録文書を残しているのですが、その中にこの城と最後の城主のことが詳しく書かれていたのです。のちにこの大きな建物の中に病院が造られたのです、と医者は語った。医者の話は私を何とも表現しがたい興奮に陥れた。それは夢が私に見せたものと完全に一致していたからだ。ひよっとすると何らかの関連性があつて、それが人間の魂をはるか昔の事柄と結びつけるのだろうか。ある行為の恐怖が、たとえば音のない木霊のようにその場所に刻み込まれ、のちの時代に生まれてきた人間の敏感な魂に反響を生じさせたのか？私が熱に浮かされた夢だと思っていたものは身の毛もよだつような現実で、他人には感じられないが、この部屋に潜んでいて、病気のせいで高ぶった私の精神に伝わったのだろうか？秘密を明らかにしてほしいという願いが、この部屋の壁から私に放射されているのかもしれない。この生気のない部屋に、長らく守られてきた何か恐ろしいものを救済してもらいたいという生々しい渴望が息づいているのだろうか？なぜそんなことをしたのか自分でもわからないが、私はベッドから出て部屋の中をあちこちと走り回った。そこには夢が私に見せた秘密に満ちた扉がついた壁があつた。あの伯爵がやったように、私は壁に歩み寄って触った。指で触るうちに、ちょうど小銭ほどの大きさの丸いくぼみを探り当てた。事情を知らなければ、合わせ釘が壁の中にはめ込まれているように思えただろう。丸い表面を押すと、ばねが不機嫌そうな鋭い音を立てて、少したわんだ。さらにしつかり押しして

みると、途端に私が夢で見たのとちよつと同じように扉が静かにぎいっときしみ、ぱつと開いた。こうなることを期待していたにもかかわらず、扉が開いた瞬間、私は名状しがたい恐怖に襲われ、全く思いがけないほどだしぬけに怪奇な事柄の渦に巻き込まれるのを感じるあまり、最初のうちは冷静に考えることもできないほどだった。ようやく自制心を取り戻した私は、秘密の扉が何世代もの間隠匿していたものに思い切つて視線を向けた。私の前にあつたのは小さくて幅の狭い小部屋だったが、大人がまっすぐ立ったり体を伸ばして横になつたりできるほどの長さで高さがあつた。部屋の床からは黴のいやな匂いがひっそりと漂つてきたが、床には女性の衣装が一塊あつた。しかしもっとよく見ると、私は驚愕のあまり大声で叫びそうになるのを抑えねばならなかった。というのは、最初は衣類がごちゃごちゃ山積みになっていてと思つていたものが、干乾びてミイラ化した人間の亡骸を包んでいたからだ。私の目はうわの空で小部屋の薄明かりに引き寄せられ、恐るべきものを残らず見て取つた。上半身はまるで衰弱のあまりくずおれてしまったかのようにな、半分は後ろの壁に、半分は床の上にあつた。後頭部が後ろの壁にもたれかかっていたので、死者の頭は胸の方に傾き、ミイラの歪んだ顔はまっすぐ私を見つめていたが、半開きの瞼の後ろには乾燥して光を失った眼球があつた。乱れたブロンドの髪は羊皮紙のようなしわくちゃの皮膚に覆われたしやれこうべに垂れ下がっていた。最後の叫び声を上げるために開かれたか

のような唇の後ろには二列の歯がむき出されていた。ずり落ちた長い靴下をはいた両脚は、折れ曲がったように上半身の下になつていたが、肉の落ちた両手は幅の狭い小部屋の左右の壁に突き立てられ、この上なく恐ろしい形でこの女性に近づいてきた死の苦しみを物語っていた。欺かれた夫が意図せずして彼女に行つた報復は悍ましいものだ。隠し場所を知っている唯一の人間を殺すことによつて、彼は同時に非人間的なまでに残酷な判決を彼女に下したのだ。彼女は飢えと渇きにじわじわと苦しめられて死んでいったのだ。

この身の毛のよだつ亡骸を見ているうちに、体をしびれさせる不安が大樹のように私の胸から伸びてきた。「離れるんだ！」私の中で声が叫んだ。「死と戦慄のこの場所から離れるんだ。」そこで私はいきなり向きを変えて逃げ出した。しかしその時私が体験しなければならなかつたことは、それまでに私がこの戦慄すべき事件で味わつた激しい恐怖すべてを凌駕していた。そこに――私の目の前に立つていた――身じろぎもせずには火花を散らす黒い目を突き刺すように私に向け、氷のような嘲りの微笑みを唇に浮かべて――管理人が。

「そこに居やがった。」彼はこちらに向かつてつぶやいた。私の手足からはあらゆる力も、意のままになる運動能力もことごとく離れて、体とのつながりをすべて失つたかのように体の周りにずり落ちてしまい、歯ががちがちと激しく鳴つた。恐怖の餌食となつた私が何もできず、何も考えられず、しびれたよ

うに立ちすくんでいる間、手に入れたも同然の獲物を我が物にしようとする男が近づいてくるのを私の目は見ていた。彼はこちらに向かつてゆっくりと手を上げた。しかし今回は私にはわかつていた。今度は悪い夢などではないことを、これまでに夢で見た想像上のあらゆる幽霊を嘲笑う現実だということ。喉に彼の両手の圧力を感じた。彼は私を絞め殺し始めた。金切り声を一声上げて私はくずおれた。

意識を取り戻した時、私のベッドの上には柔らかな陽の光が射していた。私は別の部屋に運び込まれていることに気づいた。目を開くと、寢床の横には看護士が一人座つていて、優しい表情で私のほうに身をかがめた。私の最初の質問は管理人の声を尋ねるものだった。「彼はどこに？」そう尋ねて、自分の声がひどく弱々しいことに気づいた。

「あのお医者様はもうここにはいませんよ。」その女性はなだめるような口ぶりで言った。私はもつとしゃべろうとしたが、彼女は押しとどめるような身振りをした。「今は安静にしていなければなりません。興奮してはいけませんよ！すっかり元気になつたら、すべてお聞きになることでしょう。」そして数週間の病床生活ののち、私は次のような話を聞かされた。死んだようになつていたあなたをあの医者の手から救い出したのですよ。いずれにしてもあの人は、あの恐ろしいミイラをいきなり見たせいで突然狂気の発作に襲われたのでしょうか。しかし狂気の前兆はずっと前からあつたに違いありません。というのは、

あの人は少し前からひどく怒りっぽく、神経過敏になって、こ

の家は悍ましい秘密を隠しているのだと言いつ張っていましたから。彼はそのことを曾祖父の父親の手記で知ったようですが、曾祖父はこの城の最後の所有者の管理人だったのです。それに彼が夜な夜なこの家の大きな部屋や廊下を足音を忍ばせてうろろ歩き回ったり、壁をあちこち叩いたり触ったりする姿が頻繁に目撃されていました。あなたの事件の後、彼はすぐに精神状態を観察するためにある施設に送られ、例の手記がないかと彼の本や書類を徹底的に調べたのですが、何も見つかりませんでした。ただし試みに調査したところ、およそ百年前にあの不幸な医者 of 先祖の一人がこの城の管理人だったこと、奇怪な状況で発見された亡骸は、その管理人のいた時代に実際行方知れずになったあの男の曾祖母だということはほぼ間違いないということがわかりました。

両足が麻痺したままようやく退院した時、私は真っ先に例の施設であの医者について尋ねた。すると、あの患者は鍵がかけられ窓に格子がはまった部屋から逃亡したと知らされたが、どうやったらそんなことができたのか、全く見当もつかないということだった。当局が患者の行方を懸命に探索したにもかかわらず、彼に関するほんのわずかな手がかりすら見つからなかった。事態はますます不可解となった。

その後、彼を見たものは誰もいない。あたかも墓から吐き出された幽霊が、再び墓に吸い込まれたかのように、この地上か

ら消えてしまったのだ。

Arno Haach: *Das Schloss an der Landstraße* (1920)

作品と作者について

『救われざる者』『街道沿いの城』の両編は、共に Robert N. Bloch の編集による幻想小説集『夢のかなたに』 *Jenseits der Träume* (subkamp) に収録されている。パウル・ブツン (一八七三年インスブルック生、一九二四年ウイーン没) は医学を学んだ後、軍隊生活に入ったが、健康上の理由で退役、その後は評論家、作家として執筆活動を行った。アルノ・ハーハは本名アルノ・ヘングスバッハ、一八七七年ケムニッツに生まれ、ケムニッツやベルリンなどで編集者として、また作家として活動した。一九四五年、東プロイセンからの避難中に行方不明となっている。

JOURNAL  
OF  
THE FACULTY OF HUMANITIES  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU  
No. 83      March 2014

CONTENTS

Paul Busson: *Rettungslos*

Arno Hach: *Das Schloß an der Landstraße*

… Mariko IWAMOTO

The Department of Comparative Culture  
The Faculty of Humanities  
The University of Kitakyushu  
2 0 1 4